

人間行動学科 社会学コース

吃音者が抱く生きづらさ

—吃音者へのインタビュー調査から—

文学部 2021年度

A18LA132

ほそかわ りく
細川 陸

もくじ

はじめに

第一章 吃音とは

第二章 先行研究

第一節 障害研究の整理

第二節 〈気詰まり〉

第三節 制御のきかない体

第四節 治療がないこと

第五節 軽度障害

第六節 アイデンティティ

第三章 インタビュー調査

第一節 調査の概要

第二節 言友会について

第三節 〈気詰まり〉に関わる困難

第四節 吃音の制御

第五節 欠陥があるとされる障害者

第六節 カミングアウト

第七節 吃音者の存在証明

まとめ

おわりに

参考文献

はじめに

発音障害の一種である吃音の認知は、近年少しずつ広まっているように感じる。2011年にアカデミー賞を受賞した「英国王のスピーチ」という映画や、2018年に映画化された「志乃ちゃんは自分の名前が言えない」という漫画は、吃音者が主人公である作品だ。また、2020年のアメリカ大統領選挙では、吃音者であることを明かしているジョー・バイデン氏に、同じく吃音者である少年が党大会でスピーチを送ったことが、メディアで大きく取り上げられた。

一方で、滑らかに発話し会話することが普通であると考えられている社会において、吃音者が不利益を被ったり、生きづらさを感じたりする場面は依然として多いのではないかと考える。吃音者は、完全に発話や会話ができないというわけでもないし、車いすや白杖といった障害者であることが一瞥して分かる目印もっていない。ま

た、吃音者でなくても滑らかに話せないことはよくあることである。そのような理由から、吃音者である筆者も、吃音に関する生きづらさを他人に理解してもらえないことがしばしばあった。そこで本稿では、これまで見過ごされてきたともいえる吃音者の生きづらさについて記述したい。

第一章では、吃音の特徴について説明する。第二章では、障害研究と吃音者の生きづらさについての先行研究を整理すると同時に、その中での本稿の意義について説明する。第三章では、吃音者を対象に実施したインタビュー調査をもとに吃音者の生きづらさについて記述する。

第一章 吃音とは

吃音の言語症状には、音を繰り返す連発（例：おおおはようございます）、音を引き延ばす伸発（例：おーはようございます）、つまって音が出てこない難発（例：・・・おはようございます）がある。いわゆる「嚙む」や「どもる」¹といわれているものである。国立障害者リハビリセンターによると、吃音者のほとんどは幼児期に発症するという。発症率は幼児期で8%前後と言われており、比率は1：2～4と女性よりも男性の方が多く、7～8割の人は成長するにつれて吃音症状が消えるが、2～3割の人は成人しても吃音症状を持ったままであるという

¹ 「どもり」は一般的に差別用語であるとされている。しかし福岡言友会では、吃音者という意味ではなく、吃音の症状をさして「どもり」という言葉を使うことは問題ないと考えられているという。そのため、福岡言友会の活動中にも「どもり」という言葉を使用しているという。また、新聞社に「吃音」では意味が通じないので「吃音（どもり）」という表記をしてほしいという要望をすることもあるという。今回、インタビュー調査を実施した方も、どもりという言葉を使用していた。

(国立障害者リハビリセンター2021)。

また山田・檜田は、吃音の特徴として「波」「幅」「時間的推移」「場面性」を挙げている(山田・檜田2017: 50-51)。「波」とは、症状が自分のコントロールに関わらず、現れにくいときもあれば、強く現れるときもあるということである。また、吃音の症状がでる言葉にも「波」がある。例えば、その日の体調によって、いつもは言えていた「おつかれさまです」が急に言えなくなったり、いつも「あ」から始まる言葉が言いづらかったのに突然「い」から始まる言葉が言えなくなったりということがある。「幅」とは、個人によって吃音の重症度に違いがあるということである。ここで留意しておきたいのは、吃音の症状が重度であっても吃音を軽い問題である捉えている吃音者もいれば、軽度であっても吃音を重大な問題であると捉えている吃音者もいることである。

「主観的な苦悩が可視性の度合いと必ずしも一致しない」

(伊藤 2005 : 4) のである。「時間的推移」とは、幼児や小中学生のときはかなり症状が出現していたが、大人になると症状があまり出なくなることが多いということである。しかし、大塚が指摘するように、大人になるにつれ語彙を増やしたり経験を積んだりして、「吃りそうな場面を上手く『回避』することで、周囲からは症状が改善したように見えている」(大塚 2016 : 10) だけで、症状が改善されているとは限らない。「場面性」とは、場面ごとに吃音の現れが異なるということで、一般的には、リラックスしているときや外国語を話すときや歌うときなどは吃音の症状が現れにくいといわれている。一方、面接や大勢の前で話すときには現れやすいといわれている。

第二章 先行研究

本章では、これまでの障害研究を整理したうえで、吃音者が被る不利益や、吃音者が経験する生きづらさについての先行研究をまとめる。先行研究は、大きく分けて「〈気詰まり〉」「制御のきかない体」「治療法がないこと」「軽度障害」「アイデンティティ」の5つに分類することができた。これより順に説明する。

第一節 障害研究の整理

障害研究は、「個人モデル」と「社会モデル」の大きく2つに分けることができる。

個人モデルでは、障害が「個人の身体的・精神的な欠陥としてのみ捉えられ、医学的な治療の対象とされるとともに、リハビリテーションによる回復に向けての努力が障害者に不断に要求」(星加2002:107)される。秋風は、個人モデルの考え方は「世界保健機構(WHO)

が1981年に導入し、2001年まで採用していた国際障害分類（ICIDH）の障害の定義と図式に明らかである。」（秋風213：18）と述べる。その定義とは下記である。

インペアメント：心理学的、生理学的または解剖学的な構造または機能の何らかの喪失または異常

ディスアビリティ：人間にとって通常と考えられている方法または範囲で活動する能力の（インペアメントの結果起こった）何らかの制約または欠損

ハンディキャップ：インペアメントまたはディスアビリティの結果、個人に生じた不利のことであり、その個人の役割（年齢、性、社会的・文化的要因に拠

る)の遂行を制約し、または妨げるもの

つまり個人モデルでは、インペアメントがディスアビリティを引き起こし、その結果ハンディキャップを負うとされ、障害の原因はインペアメントを持つ個人のみに関与されるのである。

一方、社会モデルでは、障害を個人のものではなく社会的障壁であると捉える。社会学や障害学における主流の考え方は社会モデルである。社会モデルの考え方は、「社会モデルの基礎を提示した」(秋風2013:19) 隔離に反対する身体障害者連盟(UPIAS)²の定義に

² 1960年代後半、イギリスの障害者施設で、施設入居者による自治活動が施設批判と入居者による施設の自主管理へと発展する。この運動の中心となった入所者のポール・ハントは1972年に、全国紙「ガーディアン」の投稿欄にて施設批判を展開

明らかである。

インペアメント：手足の一部あるいは全部の欠損、または手足の欠陥や身体の組織または機能の欠陥

ディスアビリティ：現状の社会組織が身体的インペアメントのある人々のことをほとんど考慮しないために、社会活動のメインストリームへの参加から彼らを排除することによって引き起こされる活動の不利益や制約

つまり社会モデルでは、インペアメントではなくディ

し、施設に入所している障害者たちに対して利用者主権運動を呼びかけた。このハントによる呼びかけに呼応した人々によって結成されたのが、隔離に反対する身体障害者連盟（UPIAS）である（杉野 2007:155）。

スアビリティが障害を引き起こすのであり、障害の原因は個人ではなく社会にあると考えるのだ。

社会モデルに対しては、いくつかの批判もある。秋風は、「障害者のリアリティであるインペアメントに起因する経験、ネガティブなものも含めて感情などは覆い隠されてしまうこととなる」（秋風 2013：20）と、社会モデルはインペアメントを軽視していると指摘する。さらに秋風は、社会モデルは「インペアメントにおいて可視的ではない障害者や、自身を重度障害者と認識していない・認識できない障害者」（秋風 2013：20）の問題をおざなりにし、可視的で重度だという自己認識がある障害者の問題だけを扱ってきたと批判する。このように、社会モデルの中でも社会の問題点を重視する考え方や、社会とインペアメントの両方を俎上にのせようとする2つの考え方があるといえる。

このような障害研究の中での本稿の意義は、これまで

軽視されてきたとされる軽度障害の一つである吃音について、インペアメントを重視して、吃音者の語りを記述できることにあると考える。

第二節 〈気詰まり〉

ゴフマンによれば、吃音は本来あるべきと想像される滑らかなコミュニケーションを阻害し、会話の参加者によって視覚的あるいは聴覚的に観察される「客観的兆候」として、〈気詰まり〉を生じさせ、会話の参加者に緊張と当惑をもたらすという（ゴフマン 1967 = 2002 : 97）。それによって、吃音者はコミュニケーション上の欠陥があると聞き手に認識され、相互行為の場面から締め出されという危機に常に直面する。また逆に話し手である吃音者には、腹がしめつけられる感じ、体がふらふらする感じ、異常に緊張している自覚、ぼんやりした感じ、のどの渴き、筋肉の緊張といった、「主観的な兆候」

という心的動揺が見られるという。

渡辺によれば、吃音者はそのような〈気詰まり〉を回避するために、言い訳や謝罪など他者への表敬を表出する「修復的交換」と、言葉の言い換えや話し方の工夫や相互行為に参入しないことといった仕方で〈気詰まり〉を回避し品行を保つ「補助的交換」を行うという（渡辺 2003：183－184）。しかし、吃音者は、言い訳や謝罪や言い換えをする際もうまく発話できないことがしばしばあるために、〈気詰まり〉を回避することはたやすいことではなく、次第に相互行為の場면을忌避するようになるという。

吃音者が〈気詰まり〉を回避するために行う「補助的交換」や相互行為からの逃避といった行動は、吃音の症状の一つであると言われるほど、吃音と密接に関わって

いる。吃音臨床研究会³は、言語に関する症状以外にも、回避（発話することを避けること）を吃音の症状としてあげている（吃音臨床研究会2021）。

また、吃音者は〈気詰まり〉を避けたいと考えており、吃音それ自体を避けたいと考えてはいないという研究もある。藤島は、「たとえ『どもる』という現象が存在したとしても、お互いがそれを気にすることなくコミュニケーションできるのであれば、それは障害として意識されることもないであろうし、問題にはならないはずである。」（藤島2006：148）と述べる。

ゴフマンや藤島は吃音を相互行為から記述している点で社会モデルに近い研究であるとえる。一方、渡辺は

³ 日本吃音臨床研究会は、「吃音（どもり）と上手につきあう」ことを目指し、1994年に発足した。吃音者やその保護者、ことばの教室の担当者、病院や施設の言語聴覚士、吃音研究者、さらにはコミュニケーションや人間関係に関心のある人々などが、幅広く参加する研究会で、会員数は、約700名である（日本吃音臨床研究会：2021）。

〈気詰まり〉に対して吃音者自身の対処を詳しく記述している点でインペアメントを重視する社会モデルであるといえる。吃音者にとって吃音は問題ではなく、〈気詰まり〉が問題であるという藤島の意見はとても興味深いが、吃音というインペアメントを軽視しすぎているようにも感じられる。また、ゴフマンは、吃音が〈気詰まり〉を引き起こす仕組みや吃音者の主観的兆候は説明していたが、それにまつわる吃音者の具体的な生きづらさは記述されていなかった。本稿では、その点についても記述したい。

第三節 制御のきかない体

吃音は、先述した「波」や「場面性」といった特徴があるため、本人でも予測できない経験であるが、吃音者はなんとか吃音を制御しようとする。伊藤によれば、吃音者は個々の場面では、今回はうまくしゃべれた、今回

はうまくしゃべれなかった、次回はうまくしゃべれるだろうか、というような自分の身体を監視するまなざしを常に持つようになるという（伊藤 2005：5）。そのため、「吃音者が〈気詰まり〉への関与を繰り返すうちに、制御のきかない身体に対するまなざしは研ぎ澄まされてゆく」（伊藤 2005：5）のである。

制御がきかなかつたとしても、吃音者はなんとか吃音をコントロールしようと悪戦苦闘する。大塚によれば、個人的で不安定的な「波」や「場面性」に対処するために、それぞれの吃音者は自己をコントロールする技法を編み出さざるをえず、さらに「波」や「場面性」に合わせて、様々な技法の中から適切なものを選び取らなければならないという（大塚 2016：11）。吃音臨床研究会は、情緒性反応（吃るかもしれないという予期や不安により、また、吃ったことによって、表情や態度に変化が起こること）、随伴症状（吃っている状態から抜け出す

ためにしようとした動作が身についてしまうこと)、工夫
(吃らずに話そうとするために工夫を行うこと)も、吃
音の症状であるとしている(吃音臨床研究会2021)。

これらの研究は、吃音を回避するために吃音者自身が
努力するという様子が記述されているので、インペアメ
ントを重視する社会モデルだといえる。伊藤の述べる「身
体を監視するまなざし」について、具体的な事例の言及
はされていなかったので本稿ではその点について記述し
たい。

第四節 治療がないこと

菊池によると、吃音の原因として、左利き矯正説、親
が本人に吃音であると意識させることにより吃音が始ま
るとされる診断起因説、遺伝・性差・体質・性格といっ
た先天的な特性や条件などに起因するとされる素因説、
強い精神的不安が原因とされる欲求抑圧説など、様々な

原因が提唱されてきたが、未だに吃音の原因は解明されていないという（菊池 2014：232－233）。

そのため専門家ですら、適切なアドバイスができない場合も多い。檜田によると、就学前の3～5歳ごろに、吃音について保護者が相談に出向いた場合、「成長とともに治るので様子を見ましょう」（檜田 2016：45）と言われることが圧倒的に多いのが現実であるという。これは先述したように、自然に吃音症状が消失する吃音者の割合は8割という現象があるためであると考えられる。さらに、吃音者やその親が、吃音について最初に相談すると考えられる医者や教師などが、吃音について信頼できる十分な知識を持ち、臨床経験を持っている可能性は残念ながら高くはなく、よかれと思ってか無責任な根拠のない助言をしている場合までであるという。

これらは、吃音を治療することが望ましいとする個人モデル的な考えの中で起きることを記述した研究といえ

る。檜田が述べていたのは、吃音の子どもを持つ親が専門家に相談しても、適切な助言を得られないということであった。では、吃音を持つ本人は、専門家から適切な助言を得られなかったとき、どのような思いを抱き、どのように行動するのだろうか。また、専門家から誤ったことを言われたり様子を見ましようと言われたりした親を持つ吃音者は、どのような子ども時代を送ったのだろうか。本稿では、吃音者本人に焦点を当てて記述したい。

第五節 軽度障害

吃音者は軽度障害としての生きづらさを抱いているという意見もある。堀によると、軽度障害者は、障害者スポーツの範疇からこぼれ落ちたり存在が不可視であったりするため、不利益を被る可能性があるという（堀 2017: 49）。具体的に吃音者が被る不利益として、「吃音症ゆえに、体育会系特有の嘲笑や揶揄の対象となった

り、選手間でのミーティングの際にうまく話すことができなかつたこと、また時として指導者に質問することができずに、結果として上達の機会が奪われたりこと（原文まま）」（堀 2017：49）があると語られていた。

また、田垣によれば、軽度障害者は特に健常者との関わりの中かで、障害者でも健常者でもないという、どっちつかずのつらさを経験するという（田垣 2006：54）。そして場合によっては、カミングアウトのジレンマに陥るという。周囲の健常者に、障害を呈示して介助を求めれば、身体上無理な行為は避けられるが、介助を頼まざるを得ない自分に気づかされる上に、障害者というスティグマ、努力を放棄しているという批判、詮索や同情を受ける恐れがある。一方、障害を呈示せず介助を求めなければ、身体上の無理な行為は避けられないし、努力が足りないといった批判、介助を求めなかつたこと自体の批判を受ける恐れがある。軽度障害者は、このよう

なジレンマを避けるために、障害についてカミングアウト（説明）するときには、スティグマ、批判、詮索や同情を回避するために「場の雰囲気壊さないように」（田垣 2006：61）タイミングを見計らう、説明しやすく介助を受けやすい状況を作るために「わざと介助される場面を作る」（田垣 2006：62）という2つの戦略をとるといふ。

これらの研究は、障害者が陥る状況を詳細に記述しているため、インペアメントを重視する社会モデルであるといえる。田垣が研究対象にしていた軽度障害の中でも、それぞれの障害によって差異があると考えられるため、吃音者にあてはまるかどうかは分からない。また、堀は、吃音者のスポーツにおける生きづらさしか記述していなかった。本稿では、軽度障害の中における吃音者特有の生きづらさを日常やカミングアウトといった視点から記述したい。

第六節 アイデンティ

吃音者の生きづらさとして、本当の自己とは違うアイデンティを表出してしまうことがあげられる。例えば、檜田によると、吃音に対する誤った知識から吃音者は、緊張の強い人・慌て者・小心者といったレッテルを無条件に張られてしまうことがあるという（檜田 2016 : 36）。

このように、自己と違うアイデンティを表出してしまうことのある吃音者は、石川が述べる「存在証明」に、より躍起になりやすいと考えられる。存在証明とは、「価値あるアイデンティティを獲得し、負のアイデンティティを返上しようとして、日々あらゆる方法を駆使する」（石川 1996 : 171 - 172）ことで、人間はこれに躍起になる動物だという。石川によれば、存在証明の方法には、人に知られると否定的に評価されるアイデン

ティティを隠し価値あるアイデンティティの持ち主であるように見せかける「印象操作」、社会的威信の高い集団へ所属したり能力や資格を身に着けたり、価値あるアイデンティティを身に着けて否定的な価値を帯びた自分を補填しようとする「補償努力」、意識的もしくは無意識的に他者の価値を奪ったり差別することで、相対的に自分の価値を高める「他社の価値剥奪」、社会の支配的な価値を作り替えることによって、これまで否定的に評価されてきた自分の社会的アイデンティティを肯定的なものへと反転させようとする「価値の取り戻し」の4つの方法があるという（石川1996：172－174）。

さらに石川は、「存在証明が突出するのはとりわけ被差別者においてである。差別は人から存在価値をはく奪する。差別を繰り返し被った人びとは、激しい自尊心の損傷を経験する。損傷した自尊心は修復を要求して存在証明に拍車をかける。」（石川1996：172）と述べ

る。それを踏まえて秋風は、軽度障害者の存在証明について記述し、特に軽度障害者は障害という負の要素を払拭するために補償努力を続けることが多く、その価値が本物の自分だと考えたいのだと述べる（秋風2013：60－63）。なぜなら軽度障害は、健常者の価値観や社会通念を内面化しているため、劣位とみなされがちな障害者にはアイデンティファイできない一方で、障害によって健常者社会から疎外されるかもしれないという孤立の不安を常に抱えているからだという。しかし、補償努力によって得られる評価は、障害者のわりにはできるといった内容であることが多く、軽度障害者はさらなる補償努力に努めることになるという。

秋風はもちろん、石川も障害者にスポットを当てて記述しているため、これらはインペアメントを重視した社会モデルの研究だといえる。海老田は秋風が述べる補償努力について、「補償努力自体は軽度障害者特有の問題で

はない。マイノリティ全体によく見られる傾向である。
そうであるなら、再び「補償努力」をめぐる軽度障害者
特有の問題領域を追究し、記述することが上策ではない
か？」(海老田 2013 : 3) と、軽度障害特有の存在証
明や補償努力のありようについてさらなる研究が必要で
あると指摘している。本稿ではそれを踏まえて、吃音者
特有の補償努力をめぐる問題領域を探りたい。

第三章 インタビュー調査

第一節 調査の概要

インタビュー実施の対象者の選定方法であるが、吃音を持っていることを公言している人は少ないため、吃音のセルフケアグループである香川言友会と、筆者の知り合いの吃音者をお願いをした。その結果、香川言友会に所属する2名と、筆者の知り合い1名の合計3名にインタビュー調査の承諾を得ることができた。調査の方法は、筆者と対象者で1対1の対面で会話をする形式で、カフェで実施した。会話の内容は了承を得たうえで、携帯電話のボイスレコーダー機能で録音した。

それぞれの対象者について下記表にまとめる。

表 調査対象者一覧

氏名	年齢	職業	言語症状	発症時期
Aさん	60代	小売業	難発	幼少期

Bさん	50代	放送業	難発	幼少期
Cさん	20代	大学生	難発	幼少期

第二節 言友会について

ここではまず、AさんとBさんが所属している言友会について説明する。

言友会は、1966年に創立された吃音のセルフヘルプグループで、伊藤伸二を中心に、民間吃音矯正所で出会った人々で結成された。現在、言友会は、吃音があっても豊かに生きるという理念を掲げている全国言友会連絡協議会⁴のもとで30以上の都道府県に広がって活動している。全国言友会連絡協議会によれば、言友会の活動の中心は、参加者がお互いに体験を話し合う「分かち

⁴ 1968年に、全国各地に存在する言友会を中心とした、吃音者のセルフヘルプグループを緩やかに束ね、その拡大と充実を図るために発足した。2006年からNPO法人格を取得している（全国言友会連絡協議会：2021）。

合い」で、それによって自分は一人ではないという事実に気づき、さらには様々な活動の中で、吃音のある自分が、そのまま、ありのままでも既に他者や社会に良い影響を与える力を持っていることを実感し、吃音者がエンパワメントされることにあるという（全国言友会連絡協議会：2021）。

その中で、香川言友会は2020年に設立され、当事者だけでなくその保護者や支援者も参加している。設立目的は、「吃音のある人やその家族が、当事者や支援者たちと悩みや課題を分かち合いながら、豊かに生きていける社会を実現するために行動すること」（香川言友会：2020）である。主な活動は月に一回の例会で、グループワークを積極的に取り入れているという。その他にも、近隣の都道府県と交流を図る地域ブロック別の大会や、全国で交流を行う言友会全国大会などを開催したり、吃音を社会にPRする活動として大学に出前授業を行った

りしている。

第三節 〈気詰まり〉に関わる困難

Bさんは、「吃音によって日常生活で嫌なことを感じることはありますか」という質問に対して次のように話す。

Bさん「最近はね、すごく昔みたいにね、なんか言うたりする人がいなくなってきましたけど、今はだいぶ言えるようになってきたんで。もうそうですね、十年くらいの間にだいぶ。まあ（どもりながら）言いよるとは思うんですけど、昔と比べたらだいぶようになってきてるので、面と向かって（悪口などを）言うてくる人はあんまりいませんんですけど。雰囲気的にね、なんかいやですよ。『え。』ってなったり、こっちも頭の中では分かっているけどうまく説明できないので、もどか

しきとういかストレスになりますよね。」

Bさんは、昔と比べて吃音が出ることが少なくなり、他者から吃音について何かを言われることは少なくなってきたのにも関わらず、「雰囲氣的にね、なんかいやですよ。『え。』ってなったり」と話す。この「え。」というのは聞き手が吃音を〈気詰まり〉と認識し、緊張や当惑を感じている状況であると考えられる。社会では、コミュニケーションにおいて滑らかに発話することは当たり前のように考えられている。テレビやラジオはもちろん、会議といった日常的な場面でも、言葉をつまらせた人は謝罪し、聞き手はそれをからかうことがある。そのような社会において、吃音は異常として捉えられ〈気詰まり〉を生み出していると考えられる。そして、日常生活で嫌なことは何かと聞いたときに、Bさんが真っ先に〈気詰まり〉を挙げたということから、吃音者にとって〈気詰

まり〉が重大な問題であるということがうかがえる。

また、Bさんは、〈気詰まり〉が起こったとき、「頭の中では分かっているけどうまく説明できないので、もどかしさとういかストレスになりますよね。」と話している。Bさんは、吃音による〈気詰まり〉によって会話の参加者に当惑や緊張をもたらすことや自身が不利益を被ることを危惧するだけでなく、コミュニケーションにおいて伝えたいことがうまく伝わらないことについて、いらだちを抱えていることが分かる。

Aさんは、「吃音によって日常生活で嫌なことを感じることはありますか」という質問に対して、自身の吃音を肯定的に受け入れているため今は全然ないと前置きをおいて、次のように説明する。

Aさん「言い換えしたりとか。で、やっぱみんなも結構苦労しとると思うけど、マクドナルド行ってね、チ

ーズバーガー食べたいんやけど、言えなくて別のやつとか。ホットコーヒーがね、普通のコーヒー飲みたいのにアイスコーヒーとか、反対かもわからんけど。あが言えないから。すぐそういうので、結構長かったけどね、そういう状態が。だからタクシー乗ってもね、あの、行き先言わんとスタートしたりね。だから言いやすいというか、ほんとは違うんだけど、もっと手前で降りたりね、言いやすいところで降りたりね。そういうのが色々あった。」

Aさんの場合、Bさんが挙げた〈気詰まり〉ではなく、〈気詰まり〉を避けたるために自分が考えている言葉ではない、言いやすい言葉を選択して発話しなければならず、思い通りの行動ができないことが嫌だと述べた。このような〈気詰まり〉の回避の仕方は、言葉の言い換えや話し方の工夫や相互行為に参入しないことといった仕

方で〈気詰まり〉を回避し品行を保つ「補助的交換」だと考えられる。Aさんにとって〈気詰まり〉は、自分が考えていることとは全く異なる単語を選んで発話するほどに避けたいものなのだろう。特に発話できない単語が、会社名や住所や名前など身近によく使うものであるほど、困難は大きいと予想される。

また、Cさんは、「吃音によって日常生活で嫌なことを感じることはありますか」という質問に対して、発話をあきらめざるを得ない状況になることだと説明する。下記は、発話をあきらめざるをえない状況になるときの一例である。

Cさん「僕は、けっこう冗談というか、皆を笑わせたいみたいな気持ちがずっとあったんですけど、吃音があるといいタイミングで言えないんですよね、面白いこと思いついても。冗談って誰かが言ったこととかに、

間髪入れずにツッコミを入れるから面白いっていう
のがあると思うんですけど。やから、せっかく面白い
ギャグとか思いついても、いいタイミングで言えなく
て、言うのをやめるみたいなの。」

Cさんの場合、無意識的に〈気詰まり〉が起ることを
回避しているといえる。どもりながら面白いことを言
う、もしくは吃音によってうまく発話できず、ずれたタ
イミングで面白いことをいうと〈気詰まり〉を生じてし
まうことを、瞬時にもしくは経験的に判断し、発話する
ことを控えている。また、Bさんの語りにも似たような
ものがあつた。

※「吃音があることで会話で困ることはありますか？」

Bさん「やっぱり、みんなポンポン言うてたらね、会
話に入りづらいとかありますよね。話し合いとか。」

Bさんも、すらすらと会話が進んでいる中で、どもりながら発話すると、〈気詰まり〉が生じることを予想し、発話を控えていると考えられる。さらに、会議のように流暢なコミュニケーションが当たり前だとされている場面において、発話の前に一呼吸を置く必要があったりなかなか言葉が出てこなかったりすることもある吃音者は、自分から発話をあきらめるというより、そもそも会話の輪に入れないといった状況が起こりうると考えられる。

第四節 吃音の制御

Bさんは、日常生活において吃音を制御するために、これまで様々な工夫をしてきたという。

Bさん「一番簡単なのは、いつどこで誰がどうしたという文章があったら、ひっくり返しますよね、発音し

やすいように。ひっくり返したり、同じような意味の単語に変えたり、紙に書いたり、メールを使うとかね、いろんな手法を酷使していますけどね。」

「一番簡単なんは」という言葉から、Bさんは、吃音をコントロールするための工夫を簡単なものから複雑なものまで複数持っており、状況に合わせて使い分けられていることが分かる。たとえば、Bさんが「一番簡単」だという文節の順番を入れ替える工夫は、固有名詞などでは使用できない。そのときには、「同じような意味の単語の意味に変えたり」、「紙」や「メール」を使ったりしていると予想される。また、Bさんが学生だった時代にはインターネットが普及しておらず、吃音をコントロールする工夫は自分で考えざるをえなかったという。様々な方法を実験的に試しながら、今の工夫が出来上がったのだろう。その過程では、自身の吃音と向き合い、吃音が悪

化・改善するたびに吃音、身体、周囲の環境を観察するという努力が必要であったと考えられる。しかも、その努力は人知れず行われるもので、他人に認められることはなかっただろう。

Cさんも、小学生のころから今までに様々な工夫を生み出し、日常生活で駆使していた。

Cさん「まず工夫というか、随伴というか、けっこう激しめに振って、首を。それと目をつぶるような癖がついてしまって。・・・(中略)・・・工夫は、太ももをつねってそっちに意識が行くようにしてみたり、最初の音を飛ばすんもありますし、単語として発音するんじゃなくて頭の中で一文字一文字に分解するイメージで話すとか、最初の音を飛ばすとか、他の似ている母音の音に変えてみたりとか、色々考えながら試しましたね、小学校ぐらいのときから。それとあとは、複

式呼吸とか、絶対に言えるって念じてから話すとか。けど、時間がたつと、体が慣れてくるといふか、効果が切れることが多かったですね。だから結局言い換えが一番無難といふか、いつも使っていました。」

Cさんが「工夫といふか、随伴といふか、けっこう激しめに振って、首を。それと目をつぶるような癖がついてしまつて。」と話すように、Cさんにとって首を振る動作は、吃音を回避するための工夫のひとつであったといえる。しかし、楽に発話するために編み出したはずの工夫が、今では自身の意思では避けることが難しい、首を振って目をつぶるといふ随伴症状として、Cさんを苦しめている。

また、Bさんと異なりCさんは、インターネットを通して吃音に関する情報をいつでも調べることができたそうだ。「複式呼吸」は、インターネット上で見つけた方法

だという。それ以外の工夫は、「小学校ぐらいのころ」から試行錯誤を重ね自分で編み出したという。Cさんに、なぜそんなに多くの工夫を考えたのかと質問すると、次のように語った。

Cさん「吃音で言えないときって、すごくつらいんですよね、うん。息がつまるというか。心臓とかもドキドキして、周りからもからかわれたりもするし。そういう状況から早く脱出したいと思って自然に増えていったっていう感じですかね。あとは、さっきもいったように、効果が切れていくやつもあるし。あとは、その時々にあわすというか、『ありがとう』が言えないってなったときに、『あーりがとう』っていうか、『あ・り・が・と・う』って一文字一文字いうか、さりげなく『さりがとう』って速めにいってごまかしまがらいうかとか、「センキュー」っていうかっていう感じですよ

よね。選択肢を持つ安心感みたいなのはあると思います。」

Cさんは、吃音によって発話できないとき、「息がつまるというか。心臓とかもドキドキして、周りからもからかわれたり」という状況に陥っている。その状況から「早く脱出したい」と考え「自然に」工夫の量が増えていったのだという。Cさんは、小学校のころから、楽に発話できる方法を考え実践し、その効果を評価して、工夫のバリエーションの中の一つにするか、さらなる改良を加えるかという身体の観察を続けてきたのだ。また、Cさんは、工夫の使い分けについて「その時々にあわせて」と話す。その例として、「ありがとう」という単語を発話する工夫として、「あ・り・が・と・う」と文字単位に区切る、「さりがとう」と母音が同じ別の行のものに置き換える、「センキュー」と別の言葉で言い換えるといった複数

の選択肢を常に持ち合わせているという。Cさんは、大塚が述べるように、個人的で不安定的な「波」や「場面性」に対処するために、自己をコントロールする工夫を編み出さざるをえず、さらに「波」や「場面性」に合わせて、様々な工夫の中から適切なものを選び取っているといえる（大塚2016：11）。

Cさんがここまで工夫の量を増やしてきた一因に、小学校や中学校で吃音について揶揄された経験が大きくあると考えられる。その内容は、話し方の内容を真似される、吃音を揶揄するようなあだ名をつけられる、50音を発音させられて流暢に発話できるかチェックされるといった、Cさんにとってつらいものであった。Cさんはそのような状況のなかで、なんとかして吃音が周囲にばれないようにしようと、工夫を生み出したのではないだろうか。一方でBさんは、工夫に対してこのように話す。

Bさん「色々な工夫したんですけど、誰に教えてもろたでもなく言い換えとかね、色んなことをやるんですけど、ただまあそれが答えにはならなかったですね。それが解決策ではないんですよね。」

Bさんは、工夫で吃音をごまかすことはできたが、完全になくすことができず、工夫は「答えにはならなかった」、つまり根本的な「解決策」にはなりえなかったと話す。しかし、Bさんは今でも文章の順番を入れ替えるといった工夫は行っている。Bさんは、工夫が根本的な解決策にはならないとわかりつつも、自分や相手がさらには社会が望む、流暢なコミュニケーションを実現するために、工夫を駆使しているといえるだろう。しかし、工夫の仕方は昔と今では少し変わったという。

B「なんていうんだろう私ほうまくいってるときとう

まくいかないときの差が激しいので、ほんでまあ最近
は諦めることにしたんですね。・・・(中略)・・・だから
100%を求めないようにしましたね。多分それは
ある程度年齢とかによる。例えば今の10代の人とか
20代の人とかにそれを求めるのは酷だと思います。
自分の思いとしてできないと思います、それはなかな
か。」

Bさんは、昔は発表するときには、話したいことを完
全に文章にしてから何度も練習し、様々な工夫を駆使す
ることで、完璧に発話しようと努力していたという。し
かし「うまくいってるときとうまくいかないときの差が
激しい」ため、最近「100%」を求めずに「諦める
ことにした」という。具体的には、話したいことを大ま
かに決めておき、あとはその場で考えながら話している
という。その理由についてBさんは、年を重ねたことに

よって広い視野を持てたこと、様々な対処法を試してみても結局どもるときはどもるということに気づいたことを挙げていた。

このように、完璧を求めないという姿勢は、身体を制御するという、終わりのみえない試行錯誤の困難から脱却するための鍵なのかもしれない。しかしBさんが話すように、その完璧を求めないという姿勢は、色々な試行錯誤をしたからこそたどりつける考え方であり、吃音を完全に制御することをあきらめきれないであろう「10代の人とか20代の人とか」にとっては難しいことだといえる。なぜなら、吃音は工夫によって制御できるときもあれば、「波」や「場面性」によっては全く出現しないときもあり、吃音者はまるで吃音を完全に克服したかのような場面に何度も遭遇するからである。Bさんのように吃音を制御することをあきらめるという決断をすることは、非常に難しいことであると考えられる。

Aさんも、言友会で他の吃音者と話したり、吃音者のYouTubeを見たり、自身の経験を振り返ったりした結果、言い換えといった工夫について否定的な意見を持つようになったという。

Aさん「予知能力というか、これ言えんなあと思ったから逃げるやろ。先に分かるやろ。音読はできんけど、しゃべるときならあれ（言い換え）ができるんやな。あれが伝わらんのよ、ほんとに。本人はどもりを隠しているつもりかもしれないけど、余計変な話し方になっていると気がついた。」

これは筆者もそうであり、筆者が話してきた多くの吃音者に共通することであるが、吃音者は事前に、発話できなさそうな言葉が予測できる。もしくは、発話しようとした瞬間に、この単語は言えないというのを瞬時に察

知することができる。そのため、言い換えやその言葉を発話しないという工夫を駆使することによって、吃音や〈気詰まり〉を回避することができるのだ。しかし、Aさんが言うように言い換えは、意味こそ通じるものの、分かりづらかったり日本語として不自然になったりすることが多い。Aさんは、このことに気が付き、今では言い換えをほとんどしていないという。Aさんは吃音をプラスに受け入れ、Bさんと同じように吃音を完全に制御する必要はないと考えているため、このような戦略が取れるのだろう。実際にインタビュー中、Aさんが発話しづらそうにする場面は多くはなかったものの、まれに発話できない言葉があった際にも、言い換えを使うことなく数秒かけて発話していた。

第五節 欠陥があるとされる障害者

Bさんは小学生のとき、吃音について保健室の先生に

相談したことがあるという。しかし、保健室の先生の返答は期待外れのものであった。

Bさん「保健室の先生にも相談したし、どうしようか
と思っ。やっぱ結局は先生も、やっぱりその知らない
んですよ。今になって分かることやけど、色んな障
害があってその中の小さい一つなんですよね。うん、
分からなかったんでしょ。で結局まあねえ、緊張し
なかったらいいよ、落ち着いてゆっくり話したらいい
んだよ、いう話になるんですが、それとは全然違うん
ですよ。」

小学生のBさんにとって、親の援助なしに病院に行っ
て、医者診断を受けるということは現実的ではなかつ
たろう。その中で、保健室の先生は吃音について専門
的なアドバイスをもらえる唯一の存在だったといえる。

しかし、保健室の先生からは、「緊張しなかったらいいよ、落ち着いてゆっくり話したらいいんだよ。」という B さんにとっては、「それとは全然違うんですよね。」と肌感覚で見当違いだと感じるアドバイスしかもらえなかった。保健室の先生に相談することは、吃音は普通とは違うものであると認めることであり、とても勇気のいることである。勇気を出して相談した結果が、無責任で見当はずれなアドバイスだったときに、B さんが感じた肩透かしを食らったような落胆は非常に大きなものであったと予想できる。

B さんは、親からも吃音についてアドバイスをもらっていた。しかし、それも B さんにとっては見当はずれのものであった。

B さん「結局、例えば音読ができんのは、勉強が足りないからだ」とそういう風に言われたので、あまり良い

関係ではないですよ。・・・(中略)・・・だから親からは勉強に関し、準備せないかんっていう感じ、甘えたらいかんっていうようなことがあったので。こっちは精一杯やってるのに、方法がないのに。」

Bさんは「精一杯やってる」のに、「勉強が足りない」「準備せないかん」「甘えたらいかん」と親から見当外れのことを言われたために親とは「いい関係」ではなかったという。Bさんの親は、吃音を知らなかったか、または吃音について誤った知識を持っていたと考えられる。

保健室の先生にも親にも吃音について見当外れな対処法を勧められ、誰にも吃音について相談できなかったBさんは、孤独に吃音と向かいあっていたといえる。その背景には、親や保健室の先生の吃音に関する無知と障害は欠陥であるという意識があったといえる。保健室の先生も親も、Bさんに対してかけた言葉は「〇〇すると

よい。」といったアドバイスであった。この根底には、吃音は治すべきものであるという、無意識の意図が含まれている。しかし、Bさんが欲しかった言葉は、吃音との向き合い方に関する正しいアドバイスや、そして何より吃音があってもいいよ、無理をしなくてもいいよという、吃音を持つBさんをそのまま肯定するような言葉だったのでないだろうか。

そのような吃音に関する疑問を解消するために、Bさんは大人になってから改めて医療機関を受診したという。

Bさん「大学と就職してすぐぐらいに、原因を究明しようと思って、いろんな病院とかいきましたよ、でも結局まずはっきり知らないとかそういうところもあったし、別の意見だったりあったんですけど、答えにはならなかったよね。」

保健室の先生や親の吃音に関するアドバイスは何か違っていると感じたBさんは、吃音の「原因を究明しよう」と思い、大学生になってから複数の病院の診察を受けたという。しかし、吃音について「まずはっきり知らない」と言われたり、「別の意見だったり」病院によって異なることを話されたが、Bさんはどれも「答えにはならなかった」と感じたという。Bさんがいう「答え」とは、どうすれば楽に発話できるのか、吃音の原因とは何なのか、そして究極的にはどうすれば吃音を治すことができるのかということであると考えられる。しかし、吃音の原因や治療法が見つかっていない以上、誰に相談してもこの答えは見つけれない。現代の社会では、病気になれば病院に行き、医者診断を受け、薬や手術によって病気を治療し、身体を正常化するという流れが当たり前になっている。そのような社会の中で、吃音も病気のような身体の一時的な異常で、医者適切な診断や治

療を受けることができれば、治せるかもしれないと考えることは一般的であるといえる。しかし吃音者は、その考えから脱却できない限り、もしくは専門家によって吃音の正確な原因と治療法が発見されない限り、あらゆる病院を受診する、インターネット上で吃音についての情報を調べ続けるといった、治療法を探すという終わりの見えない戦いを続けなければならない。

第六節 カミングアウト

軽度障害としての吃音の生きづらさに関する質問をする前に、それぞれに自身の吃音をどのように捉えているかという質問をした。その答えは、三人とも異なるものであった。

Aさん「私何回もいうけどね、吃音は病気でも障害でもないと思う、もうほんとに個性やと思うね。」

Aさんの場合、吃音は「病気でも障害でも」なく「個性」であると考えていた。その理由は、病気や障害という吃音が「すごい病気みたいなね、ものすごく不幸になるみたいな」ものであるように感じるからであるという。そのため、Aさんの場合、障害という軸で吃音を捉えておらず、中・重度の障害者と比べたときの軽度障害としての生きづらさは感じていなかった。

Bさん「まあ障害者と言えば障害者ですよ、だからある部分をとれば障害者だし、ある部分をとれば個性かもわからんけど、日によって違うんですね日というか瞬間で、ひどいときはひどいし普通ときは普通だし。」

Bさんは吃音の「波」や「場面性」によって「ある部

分をとれば障害者だし、ある部分をとれば個性」と話している。これはまさに、田垣がいう障害者でもなく健常者でもないというどっちつかずの状況であるといえるだろう（田垣2006：54）。

Cさん「障害だとは思いますがね。けど、就職とかで不利になったりしそうなんで、障害者っていうふうには言われたくないかもしれないです。」

Cさんの場合、自身の中では吃音を障害であると認識しているが、障害者という負のイメージがつきがちなラベリングを他者から受けることは回避したいと望み、「就職とかで不利になったりしそうなんで、障害者っていうふうには言われたくないかもしれない」と語った。Cさんも、障害者でもなく健常者でもないというどっちつかずの状況に置かれているといえる。

このように、吃音をどのように捉えているかは三者三様であった。しかし、カミングアウトに関わる困難は三人とも経験していた。Cさんは飲食店のアルバイトで、吃音についてカミングアウトするかどうかというジレンマに陥ったという。

Cさん「ホールスタッフ、飲食のアルバイトでやっているんですけど、ホールの誰かがレジを担当しないとだめで。レジのやり取りってホールで話すことよりも多いし、マニュアルがあるから吃音が出やすいんですよね。・・・(中略)・・・他の人にレジお願いしますって言おうと思ったんですけど、そうすると何で？っていうことになるんで。けど、アルバイト先の人たちみたいな、なんか、そんなに濃い関係じゃない人にはいいたくないじゃないですか。面接のときにも言ってないし、気づかれてかもしれませんけど。」

Cさんは、アルバイトで吃音が出やすいレジ業務は避けたいと考えたが、周囲に助けを求めることを躊躇したという。援助を求めることによって「何で？っていうことに」なりかねないと考えたからだ。援助を受けるためには、ただお願いするだけではなく、吃音についてカミングアウトし、吃音について説明しなければならない。しかし、Cさんはアルバイト先の「そんなに濃い関係じゃない人」に対して吃音をカミングアウトしたくないと考えた。Cさんは、周囲に対して障害者であると思われたいくないと考えているため、カミングアウトを躊躇するのは自然なことである。また、アルバイトという職場の特性上、周囲の人的環境はめまぐるしく変わることが予想できる。そのたびに、店長、社員、パートタイマー、大学生、高校生など様々な属性や、先輩後輩といった関係性に合わせて適切なカミングアウトや説明をする必要

が出てくるだろう。さらにCさんは、「面接のとき」吃音があることを知られると、雇ってもらえないと考え、吃音を隠そうとしたという。そのような状況で吃音をカミングアウトしてしまえば、解雇される可能性もある。このように、援助を受けるためにカミングアウトしようとしても、カミングアウトには大きな困難が伴うといえる。

一方で、Bさんのようにカミングアウトしたのにも関わらず、満足のいく援助や理解を得ることができない場合もある。

Bさん「就職してから上司には言ったんですけどもなかなか理解されなくて、もし喋るんやったら言いたいことを紙に書いとったらええやんかと言われてたり。」

※「入社してすぐに伝えたんですか？」

Bさん「やっぱりみんなには言ってないですよ、ポイントだけの人ですけど最初に言ったけど、理解さ

れなかったね、身近な人に、ほんまに切羽詰まってで
すね、言わなあかん人には言ったんですけどなかなか
理解されなかったですね。」

Bさんは、「ほんまに切羽詰まって」吃音についてカミ
ングアウトする必要があると考えた「身近な」上司にだ
けカミングアウトしたが、「なかなか理解されなかった」
という。なぜなら、上司は「もし喋るんやったら言いた
いことを紙に書いとったらええやんか」と吃音に関する
誤った知識を持ち、吃音に関するBさんの苦悩を軽く捉
えていたからである。Bさんが、望ましい援助を得るた
めには、勇気をもってカミングアウトするだけでなく、
上司の吃音についての誤った知識を矯正しなければなら
なかったのだ。しかし、人の考えを矯正することはたや
すくなく、その相手が上司や顧客である場合、さらに困
難なことだと考えられる。そして、配属などによって周

困りの環境が変わるたびに、その困難に直面する可能性があるといえる。

一方で、カミングアウトはしなかったが、吃音者であるということが周知の事実として、自然と周囲に伝わるといふこともある。

Aさん「営業しとったね、最初はあるなんルートセールスやから、どもって電話したら誰から電話したか、わかってくれる。向こうが言ってくれるんや、Aさんやって。」

※「だから自分からカミングアウトしたのではなくて自然と？」

Aさん「そうそう、だから面と向かっては言わんよ。」

Aさんは「ルートセールス」だったため、吃音によって電話口で自身の名前をなかなか言えなかったと

しても、吃音者だからAさんからの電話だろうと相手が判別し、「向こうから言ってくれる」環境があったという。Aさんのように、隠し通せないほどの吃音があった場合、カミングアウトしなくても吃音であることが周知の事実として、周囲に認識されることもあると考えられる。Bさんも吃音が周知の事実として受け入れられていたために、助かった経験があると語った。

Bさん「いつも普通に電話する場所で、みんな知っているのもあつとなつても、向こうがなんとかさんですねとつないでくれるんですよ、自動的につないでくれる。」

Bさんも電話をかける場面を例として挙げた。Bさんの場合、いつも電話を掛ける場所であれば、吃音で名乗れなかったりつないでほしい人を伝えられなかったりし

でも、「なんとかさんですね」と「自動的に」いつも話している方につないでくれる環境があったという。このように、カミングアウトしてなかったとしても、周囲に吃音が周知の事実として受け入れられていれば、うまく援助を受けられる場合もある。しかし、吃音であるということが、周知の事実として受け入れられることによって、カミングアウトしたときと同じような状況になってしまい、スティグマ、批判、詮索や同情を受ける場合もあると考えられる。

また、Cさんは、カミングアウトはしていないのに、担任の先生からクラスメイトにCさんの吃音について説明されるという、アウトィングのような経験をしたという。

Cさん「担任の先生が言ってくれたんですよね、僕の吃音に対して、何ていうんだろう、フォローというか、

Cさんは癖で言葉が出てきてしまうから、あんな感じな話し方になるだけで、からかったりしたらだめだよっていうのを。」

※「それはお願いしたんですか？」

Cさん「いや、もしかしたら親とかが言うたのかもしれませんが。」

※「それ聞いたとき、どう思いましたか？」

Cさん「あのやっぱり、複雑ですよ。先生が考えてくれたんは分かって、ありがたくもあったんですけど、けど、やっぱり、皆に気を遣われなだめな人って思われなくなかったし、悪気なく『病気じゃなかったん？』みたいに聞かれることもあったし。」

Cさんが小学年のとき、担任の先生がクラスで、Cさんの吃音を「癖」だと説明し、「からかったりしたらだめ」という話をしたという。担任の先生が吃音に対して、ど

の程度の知識を持っていたか、Cさんの親がお願いをしたのかということとは定かではないが、担任の先生なりにCさんが不利益を被らないように考え実行したことだろう。このことに対してCさんは、「複雑」な気持ちだったと話す。担任の先生がCさんのことを「考えてくれた」ことは分かって「ありがたく」感じたが、周囲から吃音について聞かれるようになったこと、周囲に気を遣う必要がある人と認識されるかもしれないと感じたことが嫌だったためだ。これは一種のアウティングのような問題だといえる。アウティングとは他人の障害やセクシュアリティについて、秘密を許可なく別の人に言うことである。Cさんの吃音は、周知の事実として周囲に受け入れられていたかもしれないが、Cさん自身はカミングアウトしたことがないし、吃音を隠したいと考えていた。その中で、改めて担任の先生からクラスメイトに吃音について話すことは、Cさんの意思をないがしろにしている

という点で、大きな問題をはらんでいるといえる。

第七節 吃音者の存在証明

インタビューを通して、吃音者にも「価値あるアイデンティティを獲得し、負のアイデンティティを返上しようとして、日々あらゆる方法を駆使する」(石川1996: 171-172)存在証明をいくつも見る事ができた。特に、先述した〈気詰まり〉を避けるために発話を避けたり様々な工夫をしたりするといったことは、吃音という人に知られると否定的に評価されるアイデンティティを隠す「印象操作」であるといえる。Aさんは、吃音を必死に隠そうとしていた過去の自身を振り返って、次のように話す。

Aさん「よくよく考えるとね、タクシーの運転手に気を遣う必要なんてないわけよ、僕たちは。だけどその

ときは、やっぱりあるわけね、周りの目というか、どもっているのを知らない人に対してもわかられたくないとか、知られたくないとか、今思うとなんでそんな全然そのときだけの人でね、タクシーなんか言わないとスタートせんわけじゃない、スマホでここといえればいいわけやろ。どうでもいいことやのに、すごい重要な問題やない。吃音のひとにとっては。そういうのにずっととらわれてた。」

Aさんは、身の回りの人はもちろん、「タクシーの運転手」にまで気を遣っていたという。なぜなら、吃音者であるということを「わかられたくない」「知られたくない」と考えていたからだ。Aさんは、自身の吃音を負のアイデンティティだと考え、それを必死に隠すことで、価値のある人間であるということを示そうとする「印象操作」をしていたといえる。

また、社会的威信の高い集団へ所属したり、能力や資格を身に着けたり、価値あるアイデンティティを身に着けて否定的な価値を帯びた自分を補填しようとする「補償努力」もみられた。

※「吃音があるからこそ、他のことを頑張ろうと思った？」

Aさん「それはやっぱりあるよね、そういうのがあると人より優れているとか気持ち的にちごてくるよね、自信ができてくるよね、全部できんと馬鹿にされっぱなしやから。」

Aさんの場合、学生時代に「馬鹿にされっぱなし」であることは嫌だと考え、吃音以外のことを頑張ろうと考えていたという。もし吃音以外の部分で、優れたところがあれば、「人より優れている」と考えることができ、「自

信ができてくる」からである。Bさんも次のような補償努力をしていた。

Bさん「見返してやろうと言うのとは違うんですけど、えーっと、放送とか小さいときは興味あったので喋るんじゃないんですけど、情報発信とか表現とかは自分の表現したいことを放送で出していけるとか、人に言うたりとかカメラ回して編集して何でもやってるのでてんそういうところで色々1人でやっていけるので、運が良かったんですけどね、見返すというよりは、自分が言葉では言えないことを放送する。」

Bさんは放送関係の仕事をされている。「自分が言葉では言えないこと」を「小さいとき」から興味があった放送の仕事を通して表現しているという。Bさんは幼少期

から、自由に表現するということにあこがれを抱いていたと考えられる。「見返してやろうと言うのとは違う」という言葉から、Bさんにとって放送の仕事を選択したことは、価値のあるアイデンティティを身に着けようとする補償努力のニュアンスは小さのかもしれないが、吃音で思うように表現できないという負のアイデンティティを放送という違う方法を用いることで克服していることは、補償努力と捉えることもできる。秋風は、補償努力によって得られる評価は、障害者のわりにはできるといった内容であることが多いと述べていたが、今回インタビューした三名は、そのような経験をしていなかった。しかし、吃音者ならではの補償努力の難しさがあった。

Cさん「吃音があれば、どの分野でも損することが多いというか、そういうのがあると思っていて。これは、悲観的になってるだけかもしれないんですけどね、僕

自身が。けど、例えばスピーチができなかったとして、勉強を頑張ろうと思っても、発表のときには詰まるから認められないし、良いところに就職しようと思っても面接があるしみたいに、話すっていうことは割とどの分野でも重要視されてるから、挽回しようがないみたいなことは感じていました、はい。」

Cさんは「悲観的になってるだけかもしれない」と前置きをしたうえで、「吃音があれば、どの分野でも損することが多い」と話す。具体例としてCさんは、「勉強」と「就職」を挙げていた。たしかに、就職をはじめとして発話することなしに、社会的威信の高い集団へ所属したり能力や資格を身に着けたりすることには多くの困難が伴うと予想される。また、発話せずに価値あるアイデンティティを身につけられたとしても、勉強における「発表」のように、成果を披露する場面で発話しなければな

らないこともある。このように、吃音者は、補償努力を行うこと自体が難しい場合もあるといえる。

また、社会の支配的な価値を作り替えることによって、これまで否定的に評価されてきた自分の社会的アイデンティティを肯定的なものへと反転させようとする「価値の取り戻し」もみられた。

Aさん「周りの人皆知ってるよ、あいつどもりやで、どもってる、どもりどもり言うて。だから他の人にからかわれたりしとった訳ね。だけどそういうのが差別用語としてね、公にできんようになってよく分からんようになってしまった。吃音言われてもわからんやろ？難しい漢字やし、そんなん習ってないし、常用漢字でもないからね。習わんのよ。だからいつできたんか知らんけど、だから私は吃音なんか言う言葉は知らんかったよね。今回、なんとなくちらっと、私は当事

者だから知ってたけど、いつから吃音という言葉を使い始めたのかとか、そんなんも全然。」

※「ではAさんは、どもりを差別用語とするのではなく、普通に使っていきたいと。」

Aさん「そうそう、一般的に使って行って、言葉を使わんことによってかえって差別してるみたいになってるよね。全般的にあるよね。昔からの言葉の方が分かりやすい。一緒なんよね、言い方変えただけで、丁寧に言うとするけど。」

Aさんは、かつては使われていた「どもり」という言葉が差別用語とされ、「吃音」という言葉に置き換えられたことについて、「かえって差別してるみたいになってる」と感じ、ただ「言い方」を変えただけでは差別的意識は変わっていないと考えていた。郡山によれば、差別語の言い換えは、語義ではなく語義の周辺部分（マイナスの

イメージ) を取り換えることを目的とし、和語ではなく漢語を使うことでそれを解消しようとしているという(郡山2013:39)。しかし、言い換えによって新たに概念を固定するとき、その対象へのマイナス評価が解消されていなければ、結局マイナスの評価を含んだままの言い換えになってしまうという。つまり、Aさんが感じている違和感は、どもりという言葉に内包されるマイナスイメージを払拭しないまま、その言い換えとして吃音という言葉が登場したことに原因があるといえる。この状況に対してAさんは、「どもり」という言葉を積極的に使いたいと考えていた。その理由は第一に、「昔からの言葉の方が分かりやすい」からである。Aさんの幼少期のころは、「どもり」という言葉が一般的であったため、どもり(吃音)についても多くの人が知っていたと感じるという。第二に、社会に対する問題提起だと考えられる。吃音当事者であるAさんが、あえて「どもり」とい

う差別用語とされた言葉を使うことには、リスクがある。Aさん自身が「どもり」に内包されたマイナスイメージを引き受けることになったり、「どもり」という言葉を使いたくない他の吃音者の反感を買ってしまったりする可能性があるからだ。しかし、Aさんはそのようなリスクを負ってまで「どもり」という言葉を使うことで、ただ言い方を変えるだけでは差別はなくならならず、吃音に関する差別意識そのものを払拭する必要があるというメッセージを社会に発信しているように見受けられる。Aさんにとって「どもり」という言葉を使うことは、「価値の取り戻し」のための、大きな賭けであるといえる。

まとめ

第三章で、吃音者の抱く生きづらさや直面する困難について記述した。その生きづらさや困難の多くは、流暢に発話することを当たり前とし、吃音者に対して「普通」に発話することを無意識的に求める、「普通」ではないものに不寛容な社会に起因しているのではないかと考える。三名に共通して、吃音の症状が発現したとき、吃音を隠そうとしていた。例えば「どもっているの知らない人に対してもわかられたくないとか、知られたくないとか」（Aさん）と、知らない人に対してまで吃音を隠していた。その理由は、普通でない吃音者の発話に対して、「雰囲気的にね、なんかいやですよ。『え。』ってなったり」（Bさん）と気まずい雰囲気になり、「周りからもからかわれたり」（Cさん）と揶揄される可能性もあるからだ。そのような「普通」でない発話に不寛容な社会に対して、3名は、発話を避ける、言い換えといった様々

な工夫を駆使して何とか吃音を制御しようとする、医者やインターネットを通して治療法を探る、カミングアウトを検討するといった方法をとることで、社会に適応しようとしていた。そしてその適応の中で、多くの困難に直面していた。

そのような「普通」をよしとする社会において、吃音者自身も「普通」を内面化している場合もあった。例えば、かつてBさんは、吃音の原因を求めて複数の病院に診断を求めている。そこには、吃音は治すべきものであるという意識があったといえる。また、Cさんの語りにおいて「吃音があったとしてもCさんの持つ価値は変わらない」といった、吃音を肯定するような発言は無かった。これはCさんが、幼少期から吃音を揶揄され、吃音は治すべきものであるという社会通念を内面化した結果であるといえる。一方で、AさんやBさんのように、年齢を重ねたり様々な経験をすることによって、発話の際

に「100%を求めないように」(Bさん)なったり、吃音を「病気でも障害でも」(Aさん)なく個性であると捉えるようになったりすると、困難や生きづらさが軽減しているように見受けられた。おそらくこれは、AさんとBさんが、言友会に所属していることにも関係があると考えられる。

ところが、吃音者も「普通」をよしとする社会の圧力をただ受け入れているわけではなかった。とくに、言友会に所属しているAさんとBさんにその傾向が強くみられた。例えば、Aさんは「どもり」という言葉をあえて使うことで、吃音という言葉に内包されたままの差別意識を解消すべきだという問題提起をしていた。また、本稿では詳述することができなかったが、Bさんは、放送業とう職業を活かして吃音者に取材を行ったり、地域の大学の出前授業に講師として出向いたりして、吃音の啓発活動を行っているという。社会の吃音に関する意識を

変えることは、長いと年月と大きな労力が必要であることが予想される。それでも、このような活動は吃音者の生きづらさを軽減するための、大きな道筋の一つであるといえるだろう。

終わりに

インタビュー調査を実施した三名は、それぞれに吃音に関する生きづらさを抱いていたため、吃音者の生きづらさを記述するという、本稿の当初の目的は達成できたといえる。一方で、吃音という「普通」ではないものに不寛容な社会に対して、声をあげて立ち向かい、吃音者をエンパワメントしようとする取り組みについては詳述することができなかった。また、今回インタビューを実施した3名の間でも、吃音の捉え方が少しずつ異なっていた。吃音に対する揶揄がひどいと言われている高校生以下の学生や、より重度の吃音者であれば、吃音の捉え方や経験はさらに大きく異なると考えられる。これらの点について調査することを今後の課題としたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、丁寧にあたたくご指導くださいました、伊地知紀子教授に深く感謝いたします。

また、調査に快く協力していただきました、香川言友会の皆様と友人のおかげで、インタビューを実施することができました。本当にありがとうございました。

最後に、これまでご指導していただいた諸先生方や様々な視点から意見をくださった伊地知ゼミの皆様など、卒業論文制作にあたり、関係してくださった全ての方に感謝の意を表します。

参考文献

秋風千恵、2013、『軽度障害の社会学「異化&統合を目指して」』ハーベスト社。

秋風千恵、2018、「軽度障害者の語りにみるディスアビリティ経験」『フォーラム現代社会学』17(0): 175-187。

石川准、1992、『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』新評論。

石川准、1996、「アイデンティティの政治」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗助・吉見俊哉『岩波講座現代の社会学15 差別と共存の社会学』岩波書店、171-185。

伊藤伸二編、1976、『吃音者宣言』たいまつ新書。

伊藤智樹、2005、「ためらいの声—セルフヘルプ・グループ「言友会」へのナラティブ・アプローチ」『ソシオロジ』154: 3-18。

海老田大五郎、2013、「エスノメソドロジストは『軽度障害の社会学』をどのように読んだか」京都社会調査研究会・公開企画原稿。

大塚諒・内藤直樹、2015、「『嚼む』身体と共に生きる—吃音自助組織での語りにみる吃音対処法の意味—」『徳島大学地域科学研究』5：46－61。

大塚諒、2016、「『カミングアウト』の複数性—『共生』を目指す吃音者の自己開示—」、徳島大学院総合科学教育部地域科学専攻平成27年度修士論文。

香川言友会、「活動紹介リーフレット」、香川言友会ホームページ、(2021年12月7日取得、<https://kagawagenyukai.jimdofree.com/活動紹介リーフレット/>)。

堅田利明、2016、「言語と自己表現—吃音の社会啓発に向けて—」『人権を考える』19：35－48。

菊池良和、2014、「歴史的事実を踏まえた吃音の正し

い理解と支援」『小児耳鼻咽喉科』 35 (3): 232
- 236。

郡山暢、2013、「ことばのタブーとその言い換え」『國
文學』97: 29-49。

国立障害者リハビリテーションセンター研究所、「吃音に
ついて」、国立障害者リハビリテーションセンター研究所
ホームページ、(2021年8月19日取得、<http://www.rehab.go.jp/ri/deparrtj/kankaku/466/2/>)。

杉野昭博、2007、『障害学 理論形成と射程』東京大
学出版会。

田垣正晋、2006、「障害・病いと「ふつう」のはざま
で—軽度障害者 どちらつかずのジレンマを語る」明石
書店。

特定非営利活動法人全国言友会連絡協議会、「法人につい
て」、特定非営利活動法人全国言友会連絡協議会ホームペ

ージ、(2021年11月14日取得、<https://www.zengenren.org/>法人について/)。
日本吃音臨床研究会、「日本吃音臨床研究会の活動」、日本吃音臨床研究会ホームページ、(2021年11月14日取得、<https://kituonkenkyu.org/jsp.html>)。

星加良司、2002、「『障害』の意味付けと障害者のアイデンティティー『障害』の否定・肯定をめぐる一」『ソシオロゴス』26:105-120。

堀響一郎、2017、「軽度障害者のスポーツ実践の研究一吃音症を事例として一」『スポーツ社会学研究』25(1):49-64。

山田実沙子・檜田美雄、2017、「生活の中の障害一軽度で非顕在的にかつ波と幅と時間的推移と場面性のある障害としての吃音と『工夫』の社会学一」『現象と秩序』6:49-76。

渡辺克明、2003、「相互行為儀礼と言語障害——〈気
詰まり〉〉を生きる吃音者」『現代社会理論研究』13：
177－189。